音楽の力／絆を紡ぐハーモニー

富士見市長 星野光弘 × 宮内庁式部職楽部指揮者（洋楽）武蔵野音楽大学教授 北原幸男

新しい元号「令和」となってから2回目の新年を迎えました。万葉集の「梅花の歌」が出典となっている令和は、英語では「Beautiful Harmony（＝美しい調和）」と訳され、人と人とのつながりがより豊かになる時代の幕明けを感じさせるものとなりました。

令和元年11月に行われた天皇陛下の即位を祝うパレード「祝賀御列の儀」では、宮内庁式部職楽部指揮者（洋楽）で武蔵野音楽大学教授の北原幸男氏作曲の奉祝行進曲「令和」が披露されたことも記憶に新しいところです。

今回の新春対談は、市内在住で本市の文化芸術アドバイザーでもある北原教授をお招きし、これまでの音楽活動の中で培った経験から、コロナ禍における文化芸術の大切さなどを伺いました。

問 秘書広報課 ☎内241

真剣に向き合うこと それでオーケストラは 一つの生き物になる

今回の新春対談の会場は、令和4年に開館20周年を迎える富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ。令和2年8月には音響設備などのリニューアルを行った。

星野 光弘　富士見市長

1957年富士見市生まれ。関沢小学校、本郷中学校、日本大学豊山高等学校、日本大学経済学部を卒業。2016年8月から現職。

市長　新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。さて、北原先生は西洋音楽の指揮者としてご活躍ですが、生まれは尺八奏者の長男であると伺っています。どのような経緯で指揮者を目指すことになったのですか。

北原　父は尺八だけでなくヴァイオリンやフルートも演奏し、邦楽と西洋音楽の両方に触れられる環境で育ったことが私の音楽の基礎になっています。尺八を父に師事しながらさまざまな西洋音楽に触れていく中で、個性のある演奏者が集うオーケストラをまとめる指揮者への憧れを強く持ちました。

市長　分野は違えど私も音楽には思い入れがあり、学生時代はバンドを組んでいました。当時はビートルズやローリング・ストーンズなど、新しい音楽が誕生した時代で、レコードを聴くと体が自然と動き出したものです。

北原　私も実は学生時代にバンドをやっていました。星野市長と私は同年代。今の話、よくわかります（笑）。

市長　真剣に向き合ったバンド仲間とは今でも交流があり、大切な友人です。北原先生も日本を代表する指揮者である小澤征爾（せいじ）氏や海外の著名な指揮者に師事し、音楽を通してさまざまな音楽家の方と出会ってきたと思います。

北原　大学卒業後、ヨーロッパへ修業に赴き、さまざまな出会いや経験をしました。現地の方々には「北原幸男の音楽とはどのようなものか」という期待と好奇心があったように思います。もちろん大変なこともありました。私の指揮中に演奏をやめてしまう奏者がいたりとか。ただ、指揮者は公演の責任者。何が起きてもその出来事と向き合うことが大切です。それを重ねることで、いつしかオーケストラの構成員と同じ魂でつながっている一体感のような不思議な感覚が生まれたのを覚えています。

市長　しかし、公演の最中に演奏をやめてしまうのは驚きですね。

北原　今でも夢に見ます（笑）。オーケストラは才能と強い個性を持った方の集まりなので、ぶつかり合いは避けられません。リハーサルでも本番でもさまざまなことが起きますが、その一つ一つに真剣に向き合いながら、最後は自分を信じて判断をくだす。そうすることで、オーケストラは一つの生き物のように音楽を奏でることができる。それが指揮者の大きな役割なのだと思います。

市長　私も11万市民の先頭に立って市政の陣頭指揮を執ることになったときは、重圧と緊張感でいっぱいでしたが、背伸びせずにしっかりと市民の皆さんと向き合ってきました。北原先生の話を聞いて初心にかえれた気がしました。ところで、令和元年11月の祝賀御列の儀では北原先生作曲の奉祝行進曲「令和」を自ら指揮されていましたね。日本中が注目していた中で、緊張感は計り知れないものがあったのではないでしょうか。

北原　とても光栄なことなのでありがたくお引き受けしましたが、最初に依頼があったときは引き受けてよいものか迷いました。引き受けた後、大変な重責から「私にできるだろうか」と苦悩する日々が続きました。即位された天皇陛下を祝うこと、そして、国民の皆さんが幸せになる素晴らしい時代へのファンファーレとなるような曲を創りたいと。私の音楽のバックボーンである和のテイストを隠し味に、これまでの経験のすべてをつぎ込み、作曲しました。

市長　当時、私はテレビで北原先生がタクトを振る姿を拝見しました。とても誇らしかったです。

北原　作曲するにあたって多くの時間を過ごしたのは、第2の故郷であるわがまち富士見市。演奏を終え家に帰ってきた時、ほっとして大きな安らぎを得たのを覚えています。

キラリ☆ふじみ所有のピアノの名器「スタインウェイ」で奉祝行進曲「令和」のワンフレーズを披露する北原教授

北原 幸男　宮内庁式部職楽部指揮者（洋楽）

桐朋（とうほう）学園大学卒業後、オーストリアやドイツの歌劇場の音楽総監督などを務める傍ら、国内外で指揮者として活躍。2006年から武蔵野音楽大学教授、2008年から現職、2011年から富士見市文化芸術アドバイザー。

北原幸男×星野光弘「絆を紡ぐハーモニー」　新春対談

市民の情熱による「未来への種まき」がここにはある

市長　北原先生は平成20年から「富士見市学校吹奏楽祭」で市内の中学・高校の吹奏楽部の生徒たちの演奏を指揮しています。また、平成24年の市制施行40周年記念事業「キラリと輝く市民コンサート」にもご協力をいただくなど、本市の地域活動に貢献いただいています。

北原　私は市に住んで20年。すでに自分のルーツは富士見市にあると思っています。そのような想いから、市の事業にも協力しています。お伝えしたとおり、良い演奏をするためには向き合うことが大切です。学校吹奏楽祭は、別の学校の仲間同士で心を重ねて一つのものを作り上げていく場。そうして生まれた演奏は込み上げてくるものがあります。ここでの出会いは大人になっても残る絆。参加するたびに音楽の力に感動します。このような事業ができる背景には、キラリ☆ふじみという素晴らしいホールがあり、活動する市民の皆さんや運営に関わる方々など、市の文化芸術の発展に情熱を注いできた方々の「未来への種まき」とも言える努力があります。

市長　地域に何かを根付かせるのは、地道な努力の継続なのだと思います。文化芸術を愛する気持ちを地域に根付かせるため、今後もお力添えをお願いします。さて、北原先生は海外にも長く生活されていましたが、海外の人々にとって音楽とはどのようなものですか。

北原　イスラエルでの客演のときのこと。当時はアラブ諸国との緊張状態が続き、常に危険と隣り合わせでしたが、それでも人々はコンサートに出かけます。聞くと、生の音楽を聴く時間は緊張や危険を超越した癒しを得る時間なのだそうです。また、ルーマニアでベートーベンの交響曲を演奏した際、終演後に地元の方々が来られ「私の祖先は15世紀にドイツから渡ってきたんだ。あなたの演奏を聴いて、遠い先祖のことを想った」と感動されていました。音楽は無機質に言えばただの「音」ですが、それだけでは表現できない、すべての人の想いに寄り添って感動を呼び起こす力があり、海外の方々はそれをより身近に、大切に思っているようです。

市長　新型コロナウイルス感染症の流行初期、外出規制の中、マンションのベランダから一斉に医療従事者への感謝の気持ちを歌う海外の映像が話題になりました。本市でも音楽が市民の心を潤す大切な要素となるよう、しっかりと文化芸術の振興を図っていきます。

市の文化芸術の拠点であるキラリ☆ふじみ。
そのメインホールは、数々のステージで公演を行ってきた北原教授からの評価も高い。

【キラリと輝く市民コンサート】
平成24年12月に市制施行40周年とキラリ☆ふじみの開館10周年を記念して開催された事業。プロの音楽家と公募の市民合唱団などで構成されたオーケストラによるコンサートが行われた。市民吹奏楽団や市内中学生の選抜チームが参加したほか、北原教授指揮による交響曲も披露された。

【富士見市学校吹奏楽祭】
市内の6中学校や富士見高校吹奏楽部による演奏と、選抜メンバーによる合同演奏が披露される。北原教授は平成20年から合同演奏の指揮をしている。

北原幸男×星野光弘「絆を紡ぐハーモニー」　新春対談

人との絆と豊かな心を取り戻すために

市長　本市はいよいよ令和4年4月10日に市制施行50周年を迎えます。現在、さまざまな市民の皆さんのご意見をいただきながら、記念事業の企画・検討をしているところです。

北原　これからの時代へ向けた素晴らしい取組みとなるよう、微力ながらお役に立ちたいと思っています。

市長　記念事業は、文化芸術の力をお借りしてコロナ禍で分断された「人と人とのつながり」を紡ぎ、豊かな心を取り戻すものにしたいと考えています。新型コロナウイルス感染症の流行によりこれまでの日常が一変し、不安やストレスを抱え、何気なく友人と会えることや何不自由なく外出できることなど、かけがえのない日常の大切さを再確認できました。音楽や芸術、文化にはそれを取り戻す力があると思っています。

北原　音楽というカテゴリーの中にもさまざまな分野があります。それぞれの分野で大切にされてきた伝統も受け継がれていくのですが、時代とともに別の分野の音楽とのコラボレーションやそれまでにない表現が生まれ、新たな音楽の潮流になることがあります。それまでの音楽を糧に、人の心を魅了する新たな要素が誕生するのです。英語で「文化」を表す「culture」は、ラテン語の「耕す（colere）」に由来すると言われています。市制施行50周年記念事業では、心を耕し、豊かにする取組みを展開すれば、コロナ禍により薄れてしまった人と人とのつながりを紡ぐハーモニーを奏でることができるはずです。

市長　市民の皆さんとともに祝う市制施行50周年記念は、次の半世紀に向けて新しいスタートを切るという門出の場でもあります。これをきっかけに、より多くの市民の皆さんがこのまちに興味を持ち、愛着を深めてもらえるようなレガシーを創出したいと考えています。また、令和3年度から「第6次基本構想・第1期基本計画」と「富士見市都市計画マスタープラン」というこれからのまちの設計図となる2つの大きな計画が動き出します。市民の皆さん一人ひとりが夢や希望を持ち、生き生きと充実した日々を送れるよう、市政運営の指揮を執っていきます。北原先生にもぜひお力添えをお願いしたいと思います。本日はありがとうございました。

新春対談　終わり　■

写真は、平成29年3月に開催された富士見市学校吹奏楽祭のようす。指揮をする北原教授はユーモアを交えながら、ときには厳しく生徒たちと向き合って音楽を作り上げる。

【富士見市都市計画マスタープラン】

土地利用や道路交通、水と緑、都市景観、防災などに関する施策の展開にあたり体系化された方針で、今後のまちづくりの基本的な方向性を示すもの。

【第6次基本構想・第１期基本計画】

第6次基本構想／20年後の理想の未来を定めたもの
第1期基本計画／基本構想の実現のため、5年間の政策・施策をまとめたもの
基本構想・基本計画ともに令和3年4月からスタートする。